岩手県の看護職を対象とした「看護技術に関する支援事業」の活動報告

鈴木美代子[1)]，三浦奈都子[1)]，高橋有里[1)]，井上都之[1)]，平野昭彦[1)]，
似鳥　徹[1)]，高橋和眞[1)]，武田利明[1)]，菊池和子[1)]

Practice Report of “Support Project for Nursing Skills”for Nurses in Iwate

Miyoko Suzuki，Natsuko Miura，Yuri Takahashi，Satoshi Inoue，Akihiko Hirano，
Tohru Nitatori，Kazuma Takahashi，Toshiaki Takeda，Kazuki Kikuchi

キーワード：看護職者，看護技術，看護継続教育
Keywords：nurses, nursing skills, continuing education in the nursing

Ⅰ．はじめに

少子超高齢化の進展，医療の高度化･専門化，国民の健康意識の変化等，看護を取り巻く情勢は変化しており，これに伴い看護職が果たす役割は拡大し活躍の場も多様化している[1)]．医療現場では知識・技術のみならず，倫理的な思考等も求められるようになり，看護職者の生涯教育の重要性がさらに増している[2)]．岩手県においても，超高齢社会の進展はもとより，在院日数の短縮化，疾病構造の変化等により住民の健康意識も変化しており，求められるニーズは多様化・複雑化しているといえる．専門職である看護職者は，こうした社会情勢の変化や多様な住民ニーズに対応していくために，確かな知識･技術に基づく看護実践能力が必要であり，また向上していくための継続教育が，個人にとっても職場の組織においても必要となる．

公益法人日本看護協会は，看護の継続教育について「看護の専門職として，常に最善のケアを提供するために必要な知識，技術，態度の向上を促すための学習を支援する活動であり，看護基礎教育での学習を基盤とし，体系的に計画された学習や個々人が自律的に積み重ねる学習，研究活動を通じた学習など様々な形態をとる学習を支援するように計画されるものである」[3)]と定義し，その指針となる「看護継続教育の基準」を2000年に策定している．そして，昨今のこうした社会情勢の変化を受けて,2010年に改訂しており，そのなかで看護の継続教育は,「個人」と「組織」の両面から推進することの重要性を強調している．

このような背景から本県では，職場の研修会をはじめ，岩手県の委託事業や公益法人主催の看護職者を対象とした多様な研修会が開催されている.我々岩手県立大学基礎看護学講座では，平成20年度（2008年度；以下より，年号は和暦で記載する）より，岩手県内の看護職者を対象に「看護技術に関する相談・支援事業（平成24年度より『看護技術に関する相談事業』に事業名を変更．以下，研修事業とする)」を継続して開催している．本研修事業のねらいは，看護の継続教育の必要性と急速に変化する医療をはじめ看護をとりまく社会情勢をふまえ，看護の活動現場におけるエビデンスに基づいた看護技術の普及・構築を図ることで，岩手県内の看護の質向上に貢献することである．

そこで，研修事業を開始して８年目を迎えた今年度は，これまでを振り返り活動内容を報告するとともに，その効果を考察し，今後の課題について検討する．

受付日：平成 28 年 10 月 13 日　受理日：平成 28 年 11 月 18 日
[1)] 岩手県立大学看護学部　Faculty of Nursing，Iwate Prefectural University

Ⅱ．研修事業の展開

1）開催のねらい

平成20年度に開催した「看護技術に関する相談・支援事業」は，我々基礎看護学講座が本学の「学部プロジェクト研究費」の助成を受けて，開学時から取り組んできた「岩手県内における看護活動の充実と普及に関する研究」の，プロジェクトの一環として開始したものである．

プロジェクト研究の目的は，現在臨床で実践している看護技術について，看護師の疑問点・困難点等を明らかにするとともに，それらの検証を行い，看護技術の再構築を図る．また再構築した看護技術について，県内看護師へ普及する方法を検討した上で，実際に普及活動を実施，評価し，岩手県における看護の充実，質の向上に貢献することである．本研修事業は，我々のこれまでエビデンスに基づいた看護技術の構築と普及を目指し取り組んできた研究成果が蓄積されてきたことで，県内の実践現場で働く看護職者へ伝達・普及していくための一つの方法としてスタートしたものであった．研究プロジェクトの全体像と本研修事業の位置づけを図１に示す．

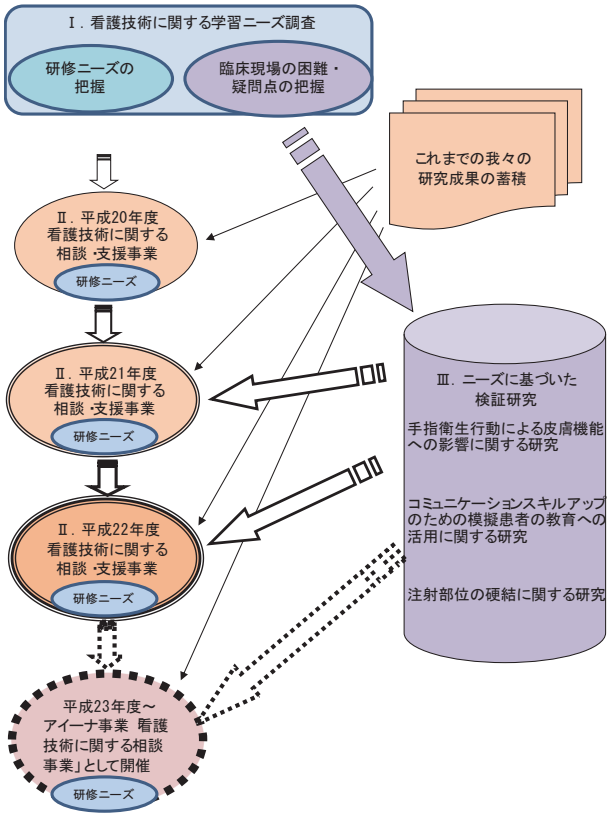

図１　平成 20 年度から平成 23 年度の研究プロジェクトの全体像

2）看護技術に関する学習ニーズの把握

研修事業を開始するにあたり，効果的なプログラム構成の基礎資料とするために，平成20年度に，看護職者がもっと知識を深めたい・手技を勉強したいと思う「看護技術に関する学習ニーズ調査」を，県内看護職者を対象に実施した．調査内容は，あらかじめ研究者らが看護技術に関する項目を，「感染予防」「健康状態の査定」「活動・休息」「生活環境調整」「体温調節」「食への援助」「排泄援助」「清潔援助」「呼吸機能調整」「創傷ケア」「予薬」「検査」「疼痛コントロール」と「その他」の14項目を設定し，もっとも学びたいと思う項目を選択してもらった．さらに，選んだ項目について「具体的にどのような内容を学びたいか」を，自由記述で回答してもらった．調査対象者は，岩手県内の医療機関，訪問看護ステーションに勤務する看護職者とした．

その結果，502名の看護職者から回答が得られ（回収率24.9％），学びたいと思う技術項目で多かった項目は，「創傷ケアに関する技術」171名（12.2％），「疼痛コントロールに関する技術」148名（10.6％），「呼吸機能を整えるための技術」144名（10.3％），「食への援助技術」142名（10.2％），「感染を予防するための技術・感染経路を断つ技術」140名（10.0％）で，これらの上位 5 項目が全体の半数（53.4％）を占めていた（図２）．結果のまとめから，概ね専門的な知識を必要とする看護技術について学習ニーズが高い傾向にあった．しかし，その一方で，普段実施している食事や排泄などの日常生活援助に関する看護技術について，日頃の経験

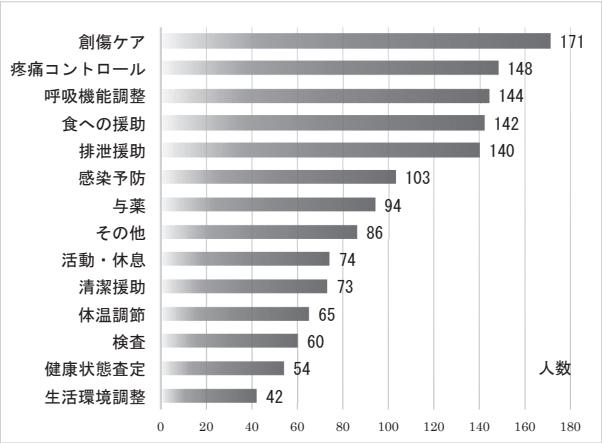

図２　岩手県内における看護職者の看護技術に関する学習ニーズ

的な知識・技術に対する疑問や課題の解決を求める記述も多くみられた.「その他」の項目では,コミュニケーション・スキルに関する内容が多く，援助の場面だけではなく，スタッフ同士のかかわりにおいても高い学習ニーズが示されていた.

以上の結果をふまえ研修会の内容は，看護技術に関する知識や技術の伝達・教授するだけではなく，日頃現場で働く看護職の方々の臨床現場の困難・疑問について，参加者同士の情報交換や交流会をとおして把握し，解決の糸口が見出せるような相談の場となるよう，研修事業名を「看護技術に関する相談・支援事業」としスタートした．なお，本調査にかかわる研究成果については,第２回岩手看護学会学術集会(2009年10月）で報告している[4)].

３）研修事業の変遷

平成20年度より研究プロジェクトの一環としてスタートした本研修事業は，平成23年度からは,「岩手県立アイーナキャンパス事業（以下,アイーナ事業とする)」の助成を受けて,「地域協働・産学連携活動支援サポート機能」に位置づけ開催することとなった．そこで，アイーナキャンパスの設立趣旨である,「社会人教育」「県民の生涯学習の支援」に基づき，研修プログラムを見直した．従来の看護技術に関する普及活動は基盤に置きながら，看護実践の場が多様化している実情をふまえ看護技術の活用をひろい場面でとらえプログラムを構成した.すなわち,最近の話題や最新の知識を伝える講習会を取り入れることで，個人の学習ニーズに応じた自己教育をサポートするともに，参加者同士の交流会や情報交換をとおして日頃の疑問や課題を共有し，リフレッシュを目指すこととした．平成23年度からのアイーナ事業への移行に伴い，本研修事業名を「看護技術に関する支援事業」とした.

その一方では,アイーナ事業となったことで,研修会の開催場所が，いわて県民情報交流センター（アイーナキャンパス）に限定され，研修内容によっては，臨床の看護場面を想定した学習環境が整備できず学習効果を低下させる懸念が生じた．そこで，実践的な看護技術を学ぶ研修内容については，ほぼ同時期に開設した，岩手県立看護実践研究センターでの研修事業へと移行し，アイーナ事業と内容を明確に分けることで，あらためて両研修会の目的を再確認し，現在に至っている.

Ⅲ．活動の実際

１．参加者の募集方法

看護職の活動場面が多様化していることや,働く現場が複雑･専門化している実情をふまえ,研修対象者を，岩手県内の医療機関，訪問看護ステーション，老人介護施設，市町村の保健センター，看護専門学校などの看護基礎教育機関で働く看護職者（保健師，助産師，看護師）とした.

募集方法は，研修対象者の所属機関に，年度のできるだけ早い時期に研修案内と申し込み用紙を郵送し，開催日の１週間前までに，ファックスあるいは電話，電子メールで申し込みを受け付けた．研修内容は，基礎看護学講座のHPで掲載し，随時情報発信している.

２．プログラムの展開

平成20年度から平成28年度までに開催した研修会のテーマと活動経過の概要を表１に示す．各年度における研修会のテーマとプログラムは,研修会終了時に毎回実施している参加者アンケートの意見や，研修会を担当する本講座教員の専門的な研究分野に関連したテーマを，毎年検討し構成している．以下，研修事業の経過にそって述べる.

１）研究成果の普及活動と相談事業

平成20年度から平成23年度は，エビデンスに基づいた看護技術の研究成果の普及活動を目的とした,「血管外漏出時のケア」「筋肉内注射」「グリセリン浣腸」「吸引」を企画した．また,担当教員の専門的な研究分野に関わる内容として,創傷ケアの「スキンケアの基本」，疼痛コントロールの「苦痛緩和ケア」,感染予防に関する「肝炎・感染Topics」「スタンダードプリコーション」を開催した．さらに，看護基礎教育修了後の学び直しとして，骨格標本を用いて形態機能学的に学ぶ「胸腹部のフィジカルアセスメント」を開催した.

開催場所は，主として岩手県立大学の滝沢キャンパスとアイーナキャンパスであった．平成21年と平成22年度は，研究成果の普及に関するテーマについて，参加者から希望があった宮古市（岩手県立宮古キャンパス）と一関市（岩手県立磐井病院）に出向して実施した．プログラムの構成は，関連性のある２つのテーマを午

表１　看護技術に関する相談・支援事業の活動経過

【平成20年度】
看護技術に関する
ニーズ調査を基に検討

【平成20年度～ 】
「岩手県内における看護活動の充実と普及に関する研究」
プロジェクトのなかで，看護技術の普及活動として展開

【各年度】
参加者アンケートを基に内容検討

【平成24年度～平成28年度】
「岩手県立大学アイーナキャンパス事業」の地域協働・産学連携活動支援サポート機能である
地域貢献活動として展開

看護技術の大項目	事業名：看護技術に関する相談・支援事業			
	研修テーマ	平成20年度（2008年度）	平成21年度（2009年度）	平成22年度（2010年度）
		開催場所（参加者の人数）		
創傷ケア	スキンケアの基本 ー褥瘡ケアー	県立大学（48）	アイーナ（27）	アイーナ（38）
疼痛コントロール	苦痛緩和ケア ーがん患者における緩和ケアー ー浮腫の基本的ケアー			県立大学（15）
エビデンスに基づく看護技術	エビデンスに基づく看護技術 ー血管外漏出時のケアー	アイーナ（48）	宮古市（11）	一関市（23）
	エビデンスに基づく看護技術 ー筋肉内注射ー	県立大学（39）	宮古市（11）	一関市（23）
	エビデンスに基づく看護技術 ーグリセリン浣腸ー	アイーナ（48）	宮古市（11）	一関市（23）
	エビデンスに基づく看護技術 ー吸引ー	県立大学（39）	宮古市（11）	一関市（23）
感染予防	肝炎，感染症Topics	アイーナ（29）	アイーナ（18）	アイーナ（15）
	スタンダードプリコーション	アイーナ（29）	アイーナ（18）	
	カテーテル管理における感染予防			アイーナ（15）
健康状態の査定	胸腹部のフィジカルアセスメント ー形態機能学の知識をもとにー	県立大学（15）	県立大学（38）	アイーナ（15）
ME機器管理	ME機器管理のポイント ー心電図の読み方・ レスピレーター管理ー			アイーナ（38）
コミュニケーション・スキル	アサーティブ・トレーニング			アイーナ（16）
参加人数/延人数		131/295人	94/145人	122/244人

看護技術の大項目	事業名：看護技術に関する相談事業						
	研修テーマ	平成23年度（2011年度）	平成24年度（2012年度）	平成25年度（2013年度）	平成26年度（2014年度）	平成27年度（2015年度）	平成28年度（2016年度）
		開催場所（参加者の人数）					
創傷ケア	スキンケアの基本 ー褥瘡ケアー	看護実践研究センター事業で開催					
疼痛コントロール	苦痛緩和ケア ーがん患者における緩和ケアー ー浮腫の基本的ケアー	アイーナ（34）	看護実践研究センター事業で開催				
エビデンスに基づく看護技術	筋肉内注射　Topics	アイーナ（14）					
	グリセリン浣腸　Topics H26年～ 安全なグリセリン浣腸について考える	アイーナ（14）			アイーナ（19）	アイーナ（10）	
	吸引　Topics	アイーナ（14）			看護実践研究センター事業で開催		
感染予防	感染症Topics	アイーナ（16）	アイーナ（26）	アイーナ（25）	アイーナ（20）	アイーナ（20）	アイーナ（27）
健康状態の査定	胸腹部のフィジカルアセスメント ー形態機能学の知識をもとにー	看護実践研究センター事業で開催					
ME機器管理	ME機器管理のポイント ー心電図の読み方・ レスピレーター管理ー	アイーナ（29）	アイーナ（50）	岩手県立大学看護実践研究センター事業へ移行			
コミュニケーション・スキル	アサーティブ・トレーニング	アイーナ（8）	アイーナ（21）	アイーナ（35）	看護実践研究センター事業で開催	アイーナ（28）	アイーナ（19）
	基本的なかかわり技法			アイーナ（37）	看護実践研究センター事業で開催	アイーナ（8）	アイーナ（19 ）
	解決志向的なアプローチ				看護実践研究センター事業で開催	アイーナ（15）	アイーナ（17）
	医療安全のためのコミュニケーション ―Team STEPPSを学ぼう―					アイーナ（22）	アイーナ（36 ）
最新の知識	メタボリックシンドローム最新知識			アイーナ（22）			
	スピリチュアルケア ートラベルビー「人間対人間の看護」から考えるー				アイーナ（40）	アイーナ（23）	アイーナ（19 ）
	代謝領域における新しい治療薬−作用機序と適応病態				アイーナ（16）		
	災害時の慢性疾患医療ついて					アイーナ（18）	
	栄養療法における炭水化物・糖質の考え方 −カーボカウント・糖質制限食の功罪−						アイーナ（17 ）
研究方法	研究手法の基本 日頃の疑問を研究につなげるために 現場でこそできるこんな研究					アイーナ（19）	アイーナ（19 ）
参加人数/延人数		101/129人	97/97人	119/119人	95/95人	163/163人	170人

前と午後に組み合わせて一日の研修内容とした．また，一方的な講義ではなく参加者同士の情報交換をとおして現場の課題や困っていることに，相談に応じるなど効果的に学べるよう相互交流の機会も設定した．

平成22年度からは，アンケートで要望が多かった，ME機器の取り扱い方に関する「心電図の読み方・レスピレーター管理」と，コミュニケーション･スキルに関する「アサーティブ･トレーニング」を新たに開講した．

平成20年度から平成23年度の，各年度の研修会への参加総数は，平成20年度が131人／延べ295人，平成21年度が94人／延べ145人，平成22年度が122人／延べ244人，平成23年度が101／延べ129人であった（表１）．

２）看護技術に関する最新知識の提供と支援事業

平成23年度から，本研修事業がアイーナ事業に移行したことや，平成24年度からは，あらたに看護実践研究センターでの研修事業を開設したことで，本研修事業のねらいと内容を再検討した．そこで，看護技術に関する専門的な知識や技術に関する内容は，看護実践研究センターでの研修事業とし，アイーナ事業としての本研修事業は，アンケートの意見などを参考に，「看護技術に関する研修会」と「コミュニケーション・スキル研修会」の大きく２つの枠組みでプログラムを構成し，現在に至っている．以下，プログラムの枠組み毎に報告する．

（１）「看護技術に関する研修会」

この枠組みのプログラムは，看護技術に関する活動場面を広く捉え，主として看護実践に関する最新知識について学べる内容を構成した．感染予防に関する「感染Topics」と安全・確実な看護技術を考える「安全なグリセリン浣腸について考える」は，これまでのテーマを継続しながらも，新しい知識や話題を提供できる学習機会とした．また，看護理論を基盤に学びを深める「スピリチュアルケア」や，日頃の臨床現場で研究的視点をもって取り組むための「研究手法の基本」，医師の立場から，「メタボリックシンドロームの最新知識」，「代謝領域における新しい治療薬」，「栄養療法における炭水化物・糖質の考え方」と，その時分に話題となっているテーマを設定し，多様な看護活動の場面で活用できる根拠に基づいた最新知識が学べる内容を構成した．

（２）「コミュニケーション・スキル研修会」

平成24年度から新たに開設したこの枠組みは，患者や家族との対人援助の関係にかかわらず，チーム医療や多職種連携の場面で活用し得るコミュニケーションに関するプログラムの内容を構成した．従来からの「アサーティブ・トレーニング」に，「基本的なかかわり技法」「解決志向的なアプローチ」を加え，さらに，医療安全のためのコミュニケーション・スキルとし

表２　参加者の属性

		H20(2008)年度	H21(2009)年度	H22(2010)年度	H23(2011)年度	H24(2012)年度	H25(2013)年度	H26(2014)年度	H27(2015)年度	H28(2016)年度
		人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)	人数　(%)
参加人数		131	94	122	101	97	119	95	163	170
有効回答数(n)		115　(87.8)	81　(86.1)	109　(89.3)	91　(90.1)	89　(91.8)	80　(67.2)	61　(64.2)	133　(81.6)	160　(94.1)
性別	女性	108　(94.0)	69　(89.6)	106　(97.2)	99　(100)	81　(94.2)	65　(87.8)	55　(91.7)	118　(93.0)	142　(90.4)
	男性	7　(6.1)	8　(10.4)	3　(2.8)	0　(0.0)	5　(5.8)	9　(12.2)	5　(8.3)	9　(7.1)	15　(9.6)
年齢	20代	41　(47.7)	23　(30.3)	32　(29.6)	21　(24.4)	25　(28.4)	22　(31.0)	12　(21.4)	38　(30.2)	42　(27.5)
	30代	22　(25.6)	16　(21.1)	19　(17.6)	21　(24.4)	13　(14.8)	13　(18.3)	7　(12.5)	27　(21.4)	31　(20.3)
	40代	14　(16.3)	19　(25.0)	31　(28.7)	20　(23.3)	23　(26.1)	21　(29.6)	21　(37.5)	28　(22.2)	45　(29.4)
	50代	8　(9.3)	17　(22.4)	25　(23.1)	23　(26.7)	19　(21.6)	13　(18.3)	15　(26.8)	29　(23.0)	29　(19.0)
	60代	1　(1.2)	1　(1.3)	1　(0.9)	1　(1.2)	8　(9.1)	2　(2.8)	1　(1.8)	4　(3.2)	6　(3.9)
職種	看護師	110　(95.7)	66　(86.8)	93　(88.6)	72　(82.8)	77　(87.5)	53　(72.6)	48　(80.0)	101　(80.0)	115　(75.2)
	准看護師	4　(3.5)	5　(6.6)	9　(8.6)	8　(9.2)	6　(6.8)	8　(11.0)	6　(10.0)	16　(12.6)	13　(8.5)
	保健師	0　(0.0)	3　(4.0)	2　(1.9)	3　(3.4)	1　(1.1)	10　(13.7)	2　(3.3)	0　(0.0)	0　(0.0)
	助産師	1　(0.9)	1　(1.3)	1　(1.0)	4　(4.6)	2　(2.3)	0　(0.0)	2　(3.3)	1　(0.8)	6　(3.9)
	その他	0　(0,0)	1　(1.3)	0　(0.0)	0　(0.0)	2　(2.3)	2　(2.4)	2　(3.3)	9　(7.1)	19　(12.4)
所属施設	病院	89　(80.9)	61　(83.6)	85　(81.0)	53　(64.6)	74　(94.9)	59　(84.3)	49　(81.7)	79　(81.4)	111　(82.8)
	訪問看護	13　(11.8)	8　(11.0)	17　(16.2)	25　(30.5)	2　(2.6)	2　(2.6)	4　(6.7)	9　(9.3)	15　(11.2)
	市町村	8　(7.3)	1　(1.4)	2　(1.9)	4　(4.9)	1　(1.3)	9　(12.9)	1　(1.7)	7　(7.2)	3　(2.2)
	その他	0　(0.0)	3　(4.1)	1　(1.0)	0　(0.0)	1　(1.3)	0　(0.0)	6　(10.0)	2　(2.1)	5　(3.7)
研修会の参加経験	経験あり		14　(19.7)	33　(32.7)	22　(27.8)	22　(28.2)	34　(50.0)	20　(32.8)	63　(52.9)	73　(54.1)
	経験なし		57　(80.3)	68　(67.3)	57　(72.2)	56　(71.8)	34　(50.0)	41　(67.2)	56　(47.1)	62　(46.0)

て「Team STEPPSを学ぼう」を新たに開設した．開催方法として，平日に開催し，気軽に参加できるよう，１日に一つのプログラムの開催とした．

平成24年度から平成28年度の，各度毎の研修会への参加総数は，平成24年度が97人，平成25年度が119人，平成26年度が95人，平成27年度が163人，平成28年度が170人であった．

Ⅳ．研修の実際と考察

研修会実施の評価と，参加者の意見・要望を次年度に反映するために，毎回の研修会終了時に参加者のアンケートを実施した（初年度は一部のみ）．アンケート内容は，参加者の属性（性別，年齢，職種，所属施設），「参加のきっかけ」「研修会での学びをどう生かしたいか」，研修内容に関連し，「今回の研修交流会の満足度」とその理由，「看護技術に関する知識や情報提供方法の希望」「本研修会への参加経験の有無」を選択で回答を求め，「今後希望するテーマや内容」について自由に記述してもらった．参加者のアンケート結果をもとに，研修を振り返り考察する．

１．参加者の属性

参加者の属性を，表２に示す．参加者の年代は，初年度を除き，ほぼ20歳代から50歳代までどの年代からも参加があり，60歳代も若干ではあるが参加していた．参加者の職種は，「看護師」と「准看護師」が９割以上を占め，参加者の所属施設は，「病院」が８割，次いで「訪問看護ステーション」が多かった．その一方で，研修会の内容によっては，看護職者や医療機関以外の職種や所属先からの参加がみられた．特に平成22年度と平成23年度の「苦痛緩和ケア」研修会は「訪問看護師」の参加があり，平成25年度の「メタボリックシンドロームに関する最新知識」研修会には，市町村の保健センターから「保健師」の参加があった．また，平成26年度の「代謝領域における新しい治療薬」研修会には，「栄養管理士」や「介護職者」の参加もみられた．平成28年度は，「基本的関わり技法」と「アサーティブ・トレーニング」に，「その他」として「介護職者」や「看護補助者」の参加があり，年々，看護の領域・分野を超えて対人援助にかかわる職種の継続教育の学習の場として活用されている傾向が示された．

２．研修会の実態

１）参加の満足度

研修会の満足度を５段階で聞いたところ，「大変満足」と「やや満足」を合わせ，８割が「満足である」と回答していた（図３）．「満足である」の理由として，「忘れかけていた基本を復習できて良かった」「最新の情報を知る事が出来よかった」「病態の復習は学生時代に受けた内容をほぼ忘れている状態だったので難しいと感じたが，勉強になった」「DVDがわかりやすかった．午後のグループワークに効果的に活かせた」や，また「日々の業務に追われ，患者さんに必要なケアを自分で考えて実践したいと考えていたり，このままでいいのか？と悩んでいたけど，他の看護師さんも悩んでいることがわかった」等の意見があった．自由記述の意見か

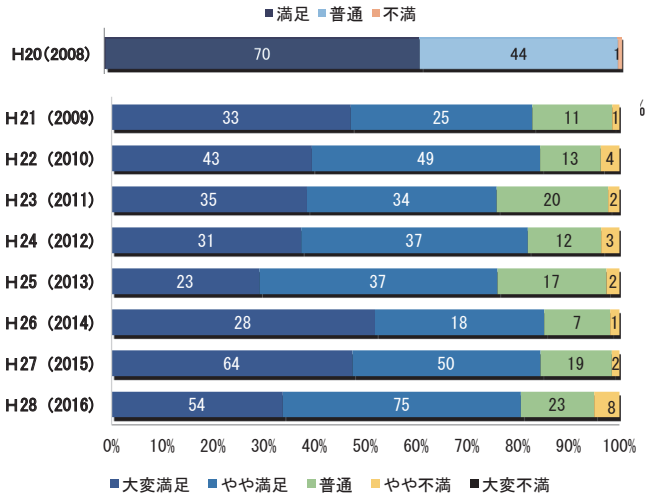

図３　参加者の全研修会の満足度

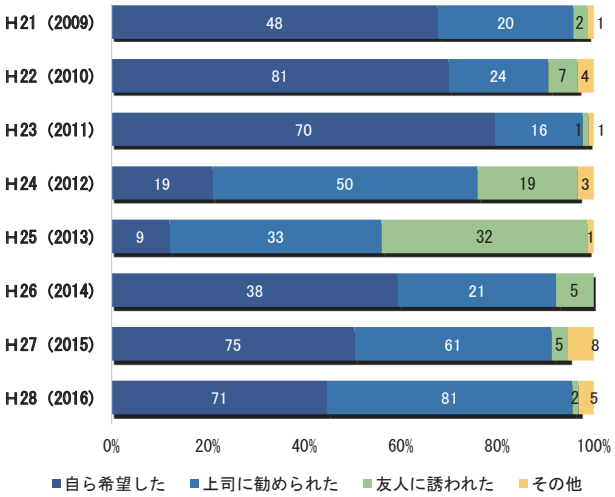

図４　研修会に参加した動機

らも，参加者は，概ね研修会に満足しており，単に知識の教授だけではなく，演習や講義をとおして，普段の活動や学習の学び直しに加え参加者同士の情報交換の場となることで，日頃のケアを振り返りリフレッシュにつながっていたと考えられる．

一方，「やや不満」の理由として，「難しかった」「人数が多すぎた．ロールプレイや自己の振り返りなどもっとしたかった」「演習前の講義をもう少ししてほしかった」という内容があり，参加者のレディネスに合わせた学習内容の検討や方法の工夫が必要である．

２）研修会に参加した動機

参加の動機は，事業を開始した平成21年度から平成23年度は，「自ら希望した」が７割を占めていた．しかし，平成24年度と平成25年度は，「上司に勧められた」「友人に誘われた」という参加者が多く，平成26年度から平成28年度は，「自ら希望した」と「上司に勧められた」がほぼ二分するかたちで示された（図４）．

その内訳をみると，平成24年度の「ME危機管理のポイント」と，平成25年度の「メタボリックシンドロームに関する最新知識」，「基本的かかわり技法」は，「上司に勧められた」が多い傾向にあった．このことから，職場の特性上，必要な知識や遭遇する機会の多い看護技術の習得を，上司に求められ参加していたことが推察された．また，コミュンケーション・スキルに関する研修は，参加経験のある友人からすすめられて参加した人がみられ，日頃の対人援助や人間関係の場面での問題解決やリフレッシュを目的に参加していることも考えられる．

３）研修会の学びの生かし方

平成21年度から23年度は，「日常のケアに生かす」と回答した人が最も多く，次いで「自身のスキルアップ」「職場に貢献する」の順に多かった（図５）．しかし，平成24年度からは，「自身のスキルアップ」が「日常のケアに生かす」を上回り，現在もその割合を推移している．参加者の傾向として，事業を開始した平成21年度から平成23年度は，主として医療や訪問看護の患者や療養者に直接かかわるケアの場で働く看護職者が主体的に参加しており，研修会での学びを日常のケアとして即実践できる看護技術や知識の習得を目的に参加していた．これは，まさに本研修事業がねらいとしていた「現場で働く看護職者へのエビデンスに基づいた看護技術の普及」に，まさに合致する参加者のニーズであったと評価することができる．

平成24年度からは，職場に還元できる必要な知識や情報の習得や，職務を円滑に遂行するためのコミュニケーション・スキルの向上を目指し，テーマによっては上司や友人にすすめられて参加する人の割合が増加する傾向がみられ，また看護職以外の参加者も見受けられた．その理由として，アイーナ事業として広く看護の場面で活用できる知識や技術に関する内容を開設したことで，多様化する看護の実践現場で働く看護職をはじめ他職種の自己教育と継続教育として活用されているのではないかと考えられた．

４）情報提供方法の希望

概ね６割が「今回のような研修会がよい」と回答しており，「関連教材や資料の紹介をして

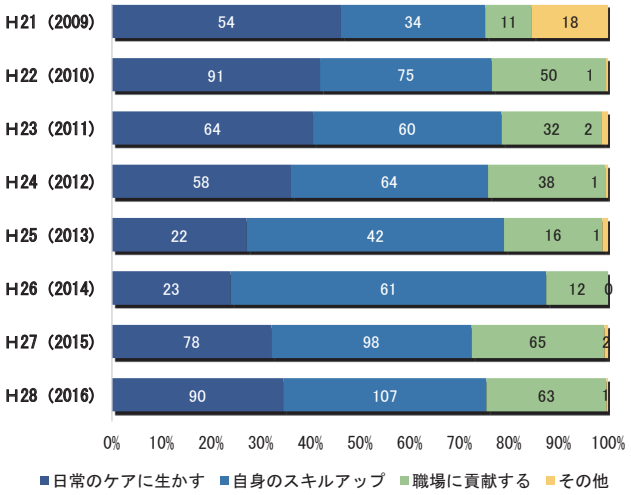

図５　研修会での学びを今後どう生かしていきたいか

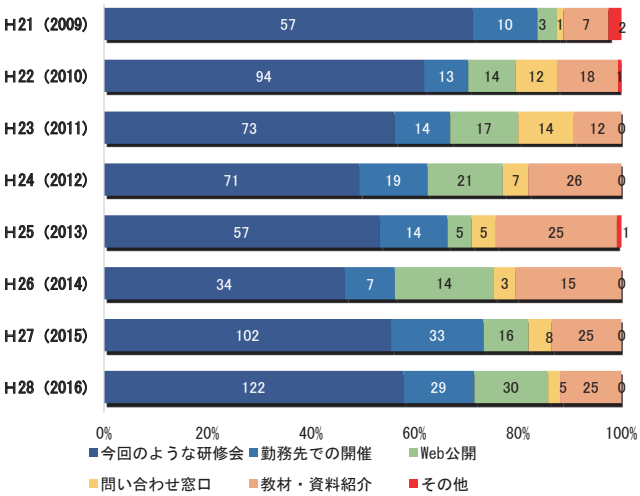

図６　研修交流会や情報提供の方法について

欲しい」「勤務先の病院等へ来て開催して欲しい」「ホームページなどＷｅｂ上で公開して欲しい」などの要望も多く寄せられた（図６）．今後は，Webサイトでの情報提供や相談窓口によるフォローアップシステムの整備について検討していく必要がある．

５）本研修会への参加経験

参加者の２～５割は，これまで「同事業に参加したことがある」と回答しており，一度の参加だけではなく，複数回にわたって参加している実態から，本研修会が県内看護職の支援事業として定着していることがうかがえる（表２）．年度によって多少ばらつきがあるものの，平成27年度と平成28年度は５割を超えて要り，また筆者が担当する参加申し込みの状況から，複数の研修会に申し込みをしてくる人は多く，一度参加した人がさらに追加で後の研修会に申し込みをしてくる状況にあり，それは年々増加していることが手ごたえで感じていたことが数値で示された．また，以前に参加したことがある友人や知人に紹介されて参加する人もみられ，送付される案内情報以外に口コミで伝わっていることが推察される．

もう一つの理由として，本研修会のプログラムが１回毎に完結し，参加したい内容だけを選択して無料で参加できることや，申し込み期限を設定せず，開催日の１週間前を目途に随時定員になるまで受け付けていることが，参加者個人にとっても職場側にとっても気軽に参加しやすいのではないか考える．

毎年同じテーマで開催していても，テーマに関連する最新知識や情報を提供することで，リピートして参加する人も多くみられることから，継続することの意義は大きいといえる．

３．今後希望するテーマ・内容

アンケートの自由記述から,「尿道留置カテーテルの管理」「経管栄養」「ストーマケア」「救急時の対応」「褥瘡管理」といった看護技術に関する内容,「プリセプター研修」「グループダイナミクス（集団行動）看護理論」「プレゼンの仕方」「看護研究」といった教育研究に関する内容,「アンガーマネジメント」「尊厳に関すること」「グリーフケア」「行動認知療法」などの，コミュニケーションなどに関連する内容が挙げられた．意見として,「看護師のための内容が多い．もっと広く看護職を対象とした内容を考えてほしい」「同じテーマでも改めて学習できるので良い」「項目を少なくしてもう少し詳しく聞ければいい」といった意見もあった．

今後希望するテーマのなかには，看護場面にかかわらない広い知識やより看護の専門性やエビデンスが求められる看護技術の知識を求める内容が寄せられ，参加者の背景や学習ニーズが多様化・専門化していることが考えられる．しかし，研修会を担当する講師は，本講座の教員であり,大学での研究教育活動を遂行しながら,それぞれの専門領域にかかわる研修内容を開設していることから，全ての学習ニーズに対応するには限界がある．今後は，研修内容に関連する資料・文献の紹介や，相談窓口の開設など,個別かつ継続的支援の構築化に向けて検討していきたい．

Ⅴ．評価と今後の課題

１．継続教育としての意義

本研修事業は開設から８年目を迎え，県内の看護職者が日頃のケアに生かせる知識や技術を，主体的に学ぶ自己教育の場として定着してきたことが，参加人数やアンケートの結果からうかがえた．　同時に，職場にとっても職務の特性上，看護職者に学んで欲しい知識や技術を習得する機会として活用していることが示され，個人と職場の両者にとって気軽に参加できる看護継続教育の機会になっていると考えられる．

その背景に，平成22年（2010年）に，新人看護職員の研修制度が努力義務化されたことで,「国や病院などの開設者は，看護師等が自ら研修を受けて，自ら進んで能力開発，向上を図る責務」が提示されたと同時に「看護師自身にも研修を受けて，自ら進んで能力開発,向上を図る責務」が提示されたことが要因にあると考えられ，本研修事業が，看護継続教育支援の一助として両者の立場に貢献してきた意義は大きいと考える．

２．研修事業の２つの柱の意義

本研修事業が柱の一つとする「看護技術に関する研修会」は，看護の活動場面が多様化・複雑化している現状をふまえ，根拠に基づいた最近の話題や最新の知識を提供する学習会では，毎年テーマが同じでも最新の知識や情報を更新しながら専門性を深めていると考えられる．も

う一つの柱の「コミュニケーション・スキルに関する研修会」は，ケアに関わる対人援助の場面だけではなく，チーム内でのかかわりや他職種との連携をスムーズに図るためのスキルアップを目指し参加していた．参加者の最近の傾向から，看護職を越えた他職種の参加がみられることで，医療・福祉の現場での円滑な人間関係の構築や対人援助につながるスキルの習得を目指すとともに，普段の職場をひと時離れてリフレッシュの機会になっていることが，参加者の実際の声から感じとることができる．

日本看護協会は，全ての看護職の「普遍的な看護の核」となる「看護業務基準」を1995年に作成しているが，これまで含まれていなかった患者の意思決定支援などに関する要素を加え，今年2016年に10年ぶりに改訂している[5)]．看護職者に求められる実践能力は，従来の知識・技術や倫理観に加え，確かなコミュニケーション技術が求められるようになったことが示され，今後において本研修会の意義は大きいと考える．

また研修会では，グループワークやロールプレイによる演習をとおして，日頃の自分を振り返るとともに，参加者同士の情報交換をとおして疑問や課題を共有し，リフレッシュにつながったとの意見が多くあり，実際に参加した教員は手応えを得ている．看護職者が日頃の看護実践を問い直し，自己と対峙していく過程は，まさにリフレクションにつながると推察され，このリフレクションは，看護職者がこれまで得た知識の蓄積と融合を促し，看護の質向上をもたらすための看護実践の過程として期待されている[6)]．このような意味からも，本研究事業が２つの柱を両立して実施していくことの意義は大きいと考える．

３．今後の課題

今後希望するテーマとして，専門性の高い内容・テーマや，看護領域に特化しない内容を求める意見があった．その一方で，「研修内容が難しかった」との意見があり，参加者の背景が多様化していることで，知識・技術の習熟度やレディネスに違いがあることが推察される．同じテーマで開催する場合には，「基礎編」「応用編」などと段階に分けて行ったり，プログラムには内容の概略を記載して予め明示することにより，より参加者の参加目的に沿った効果的な学習展開が期待できると考える．

また，我々にとっても，現場で働く看護職者と直接交流する機会は，様々な実践現場の課題や問題を把握するとともに多くの学びを得る機会になっていることを実感している．しかし，大学での教育研究活動と並行しての研修事業の展開は，時間的制約やマンパワーには限界がある．

今後は，これまで築いてきた研修事業の成果を基盤に置き，現場の看護職者が日頃の看護実践を問い直し，課題探求を行いながら発展していくための思考スキル能力の向上を目指した研修事業のあり方を探っていくことが必要であると考える．

引用文献

１）厚生労働省：新人看護職員研修ガイドライン，2010．http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf

２）鈴木康美：わが国の看護と医療の領域における成人教育・成人学習に関する文献考察，人間文化創成科学論叢，第15巻，211-216，2012.

３）公益社団法人日本看護協会：「継続看護の基準Ver.2」，2012．https://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/pdf/keizoku-ver2.pdf

４）及川正広，小山奈都子，他：岩手県内における看護職者の看護技術に対する学習ニーズの検討．第２回岩手看護学会学術集会プログラム抄録集．2009.

５）公益社団法人日本看護協会：「看護業務基準2016年改訂版」，2016．https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/kijyun/pdf/kijyun2016.pdf

６）上田修代，宮崎美砂子：看護のリフレクションに関する国内文献の検討．千葉大学看護学会誌．16（１），2010.